

紅葉賀卷の藤壺の歌「袖ぬるる」の解釈をめぐって

——源氏物語の和歌の表現と場面形成——

吉 見 健 夫

一、はじめに

紅葉賀卷では、光源氏と藤壺の密通による皇子（後の冷泉帝）が誕生する。源氏物語の世界においてきわめて重い意味をもつ出来事であるが、世を憚る特異な宿命を負って生まれた皇子に対して、真の両親である二人の主人公はいったいどのような心情を抱くことになるのか。そのことは、源氏がはじめて皇子と対面した場面の後に交わされる両者の贈答歌において集約的に表現されているのだが、この肝心の贈答歌の解釈には多くの問題があり、とくに藤壺の歌には古注釈以来近年まで諸説が続出して、いまだに議論は揺れ続けている。

本稿では、二人の贈答歌に新たな解釈を施しながら、皇子をめぐる源氏と藤壺の心情について詳細に考察する。さらにその考察に基づいて、源氏物語固有の場面形成のあり方や、そこにおける和歌の意義や役割などについても言及してみたい。

二、源氏と皇子の対面場面

まず、皇子誕生から、源氏が皇子と対面する場面までの概要を確認しておく（紅葉賀卷①324頁¹）。

皇子誕生は桐壺帝をはじめ人々の喜びの中に迎えられるが、源氏はそれが我が子であると予想しながらも、不義の露見を怖れる藤壺によって皇子との対面を許されることはなかった。生後二か月ほど経って、皇子が参内した後になってようやく待ちわびた対面の場面が訪れる。事情を知るよしもない帝は、源氏に酷似した皇子を溺愛し立坊も考えており、参内した源氏に美しく成長した皇子の姿を嬉しげに見せに現れる。はじめて皇子と対面した源氏は、すでに帝の子として寵愛される皇子の様子を見て、畏怖と喜悅の激しく交錯する動揺を覚える。一方、すぐ側で様子をうかがう藤壺は、眼前で帝を欺く状況に耐え難い葛藤に苛まれる（a「宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける」同329頁）。源氏は、この上なく美しい皇子の姿を見て、それに似る我が身ま

で大切に思えるほど胸を打たれる（b「物語などして、うち笑みたまへるがいとゆゆしうつくしきに、わが身ながらこれに似たらむは、いみじういたはしうおほえたまふ」同329頁）が、すでに帝の子として寵愛される皇子との対面にかえって惑乱して退出することになる（c「なかなかなる心地のかき乱るやうなれば、まかてたまひぬ」同329頁）。

この対面場面では、源氏は、すでに帝の子として寵愛される皇子の様子に激しく動揺し、その美しく成長した姿に強い情愛も抱くが、結局、最後は惑乱した心情の中で退出する。一方、不義の露見を怖れ続ける藤壺は、この場面でもやはり苦しい葛藤に苛まれている。

三、皇子と対面後の源氏

A¹わが御方に臥したまひて、胸のやる方なきほど過ぐして、大殿へと思す。御前の前栽の何となく青みわたれる中に、常夏²のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のものに、書きたまふこと多かるべし。

（源氏）「よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまざるまで
しこの花

⁴花に咲かなんと思ひたまへしも、⁵かひなき世にはべりけれ
ば」とあり。

（紅葉賀①p330）

引用文Aは、前節に引用した源氏退出の叙述（前節引用文c）から省略なく続いている。傍線部1は、その退出時の源氏の惑乱した心情を承けるもので、その心情によって生じた「胸のやる方な

きほど」を落ち着かせてから左大臣邸へ外出しようという。それに続く源氏の藤壺に対する贈歌は、その「やる方なき」心情を訴えて晴らそうとするものであろう。その歌には、前栽に華やかに咲き始めた可憐な常夏（撫子）の花が添えられる（傍線部2）。贈り先が藤壺ではなく「命婦の君のもとに」（傍線部3）とわざわざ語られるのは、藤壺の女房に対して、季節の花に託して恋情を訴えるものであるかのように、偽装して贈られるからである。

源氏の歌は、皇子を「なでしこ（撫でし子）の花」によそえながら、悲しみの涙を流すさまを歌っているものと、まずは通説どおりに理解してよからう。ただし「なでしこ」は、例えば「あな恋し今も見てしか山がつの垣ほに咲ける山となでしこ」（古今集・恋四・695）のように女性の比喩としても慣用されており、他者には命婦をよそえた恋歌とも解せるように作られている。この源氏の歌で注意すべきなのは、直後に歌の意を補う言葉（傍線部4、5）が付されていることである。従来、この言葉と歌との関係が明確にされずに済まされてきたが、それではこの歌の真意を十分に正しく捉えることはできないのである。

傍線部4の「花に咲かなん」は、諸注の指摘する引歌「わが宿の垣根に植ゑしなでしこは花に咲かなんよそへつつ見む」（後撰集・夏・199・よみ人知らず）をふまえている。源氏の歌の冒頭句も同歌の結句による。この後撰歌は、万葉集歌「わが宿に蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつみむ」（巻八・1448・大伴家持）の異伝と考えられ、この歌と同様に「幼い娘に思いをかけて贈った歌」「わが宿の垣根に植ゑし」は自分の管轄内

に女がいることを暗示している」とされる。この後撰歌のすぐ前には「人知れずわが占めし野のとこなつは花咲きぬべき時ぞ来にける」(後撰集・夏・198)や「ふた葉よりわが標ゆひしなでしこの花のさかりを人に折らすな」(後撰集・夏・183)など、わが物と思う年少の娘の美しい成長を「とこなつ(なでしこ)」の開花に比喻する歌が配されており、それらとの類似性からも新大系の解釈に同意される。このような引歌をふまえる傍線部4は、幼い皇子が本来はわが子であることを含意させつつ、その美しい成長を願う、親としての心情を表現するものである。

ただし、この傍線部4は「と思ひたまへし」に続いており、助動詞「き」(二重傍線部)が用いられていることから、「花に咲かなん」の願望がすでに過去のこととして回想されていることに注意する必要がある。さらに逆接を表す助詞「も」(傍点部)でつながる傍線部5「かひなき世にはべりければ」の方には、助動詞「けり」(二重傍線部)が用いられている。この「けり」には、藤壺との関係が「かひなき世」(不義の関係)であったことを今あらためて認識したことが表されている。つまり源氏は、親として幼少の皇子の美しい成長を願っていたが、藤壺との関係が不義のものにすぎなかったことに今あらためて気づかされた、というのである。皇子は願望どおり美しく成長したものの、不義の関係であるがゆえに、すでにわが子として扱うことのできない現実が気づかされた、というわけである。そのことは、前節に見た対面場面において、帝に寵愛される美しい皇子の姿に深く感動しながらも、結局は惑乱したまま退出せざるをえなかった源氏の状況とま

さしく対応する。この傍線部4・5は、傍線部5末尾の原因・理由を表す助詞「ば」(傍点部)によって、倒置法で歌へつつながっている。したがって、源氏の歌はこの傍線部4・5の内容を原因・理由とするものとして解釈しなければならない。

四、源氏の贈歌の解釈

源氏の歌は、まず上句では、折取られて手にもつ撫子の花を、対面を思い返しながら、願いどおり美しく育っていた皇子によそえつつ見えていても、結局、心は慰まない、という。下句では、それゆえに悲しみの涙が落ちて、(もともと露が置いていた)撫子の花の上の露がさらに増さる、という。露がさらに増さるとは、源氏の悲しみの涙がそれ以前よりも増し加わったことを表している。二節にみたように、源氏はもともとわが子の皇子に逢えない悲しみを抱えていたのであるが、ようやくかなった皇子との対面では、不義の関係ゆえに、すでにわが子として扱うことのできない厳しい現実状況に直面することになった。そのため、願望どおりにまさに花のように美しく成長した皇子を見ても、かえって、それまでよりもいっそう悲しみの涙を増さずにはいられなかった、というのである。前の対面場面を承けて、その状況において生じた心情を、眼前の景物の様相に託して詠じているわけである。

次に、源氏の歌の現代語訳を説明を補いつつ提示する。

(ようやく対面した美しい皇子に)よそえつつ見えても心は慰まないで、(涙が花に降り注ぎ)その露けさが(それまでよりもいっそう)増さる撫子の花であることよ。

源氏の歌は、手に取って見つめる可憐な撫子の花の上に、愛する皇子を思う悲しみの涙が降り注ぎ、花を濡らし煌めく露がさらさらその数を増していくという、理想的主人公にふさわしいきわめて美しいイメージが形象されている。花と露の取り合わせは秋の美的景物の典型として多くの和歌の類例をもつが、その表現史をふまえつつ、物語固有の心情が表現されている。藤壺の答歌は、このような源氏の贈歌の表現や内容のありかたに対応するものとして解釈する必要がある。

五、命婦の言葉と藤壺の「あはれ」

次の引用文Bは、三節引用文Aから省略なく続いている。

Bさりぬべき隙にやありけむ、御覽ぜさせて、「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほどにて、

袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなで
しこ

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、喜びながら奉れる、例のことなれば、しるしあらじかしくつぼはれてながめ臥したまへるに、胸うちさわぎていみじくうれしきにも涙
落ちぬ。
(紅葉賀① p330~331)

源氏の贈歌は命婦から藤壺に届けられるが、その際の命婦の言葉(傍線部6)にも注意したい。この言葉は著名歌「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」(古今集・夏・167)を引用する。ただしその初二句の意を反転させて、塵ばか

りのお言葉でもこの花びらにお添えくださいと、慎重な藤壺に答歌を促している。「この花びら」とは、源氏の歌に涙が降り注いだと表現された撫子の花びらのことであり、その悲しみの心象への応答を求めているわけである。また引歌の下句「妹とわが寝る常(床)夏の花」は、二人が皇子(常夏/撫子)の真の両親であることを示唆してもいる。

命婦の言葉を聞いた際、藤壺自身も「ものいとあはれに」思い知られる折であった(傍線部7)という。この「あはれ」とは、「わが御心にも」とあることから、二節にみた対面場面の後、源氏と同様に、やはり親としての悲しみの心情を抱いていたということである。したがって続く答歌は、やはり対面場面の状況において生じた心情をふまえるものとなるが、もちろん、源氏とはまた異なる自己の立場から詠じられることになる。

六、藤壺の歌の諸説と分類

この藤壺の歌の解釈については、古注釈以来諸説が提示されてきた。とくに下句の「うとまれぬ」の「ぬ」を、完了の「ぬ」の終止形とする説(「ぬ」の上の「れ」は自発。四句切)と、打消の「す」の連体形とする説(「ぬ」の上の「れ」は可能。区切なし)、の二説に大きく別れ、それによって藤壺の心情の解釈にも大きな違いが生じる。また近年では、完了と打消の両方ともに読み取るべきだとする、両義説もある。さらに、上句の「袖」の主体を藤壺の袖とするか、源氏の袖とするか、についても二説に分かれる。

次に資料1として、過去の主な諸説を「ぬ」の解釈によって分

類した(各分類はそれぞれ著作年順)。現行の主要な諸説(近代以降で、明確に現代語訳が提示されているもの)については①～⑭の番号を付してある。

〔資料1〕藤壺歌における「ぬ」の諸説の分類^⑧

完了説：〈古注釈〉源氏物語提要・孟津抄・岷江入楚(箋)・湖月抄(傍注)

抄(傍注)

〈テキスト等〉①旧大系・②集成・③新大系・④新編全集・⑤

鑑賞と基礎知識・注釈

〈論文〉⑥川島絹江・⑦鈴木宏子・⑧工藤重矩

打消説：〈古注釈〉一葉抄・萬水一路・玉小櫛・萩原評釈

〈テキスト等〉⑨全書・⑩玉上評釈・⑪旧全集

〈論文〉木船重昭・小町谷照彦・⑫吉見健夫(旧稿)・柏木由夫・

⑬山崎和子・加藤睦

両義説：〈論文〉徳岡涼・上原作和・⑭ツベタナ・クリステワ

次に資料2として、現行の主要な諸説(資料1①～⑭)を、袖の主体の解釈も含めて分類提示した。これらの諸説には、古注釈も含めたその他の諸説の内容がおおむね吸収されている。したがって藤壺の歌の諸説は、資料2の五区分(I～V)に分類される。

〔資料2〕袖の主体を含めた現行の主要な諸説の分類

	「ぬ」の解釈	完了説	打消説	両義説
袖の主体	源氏説	I ①②③④⑤⑥⑦	II ⑨⑩⑪	
	藤壺説	III ⑧	IV ⑫⑬	V ⑭

次に資料3として、資料2の五区分の各現代語訳を、藤壺歌の

諸説の五類型として例示しておく。ただし源氏説・完了説(I)および源氏説・打消説(II)の諸説の現代語訳は、同じ区分に属する諸説のそれとかなり類似しているもので、代表的なものとのみとする。藤壺説・打消説(IV)の⑫と⑬は異なるところも多いが、⑫(吉見旧稿)については本稿で考察し直したところをふまえた新たな訳を後述するので、⑬のみとする。^⑨

〔資料3〕諸説の五類型(傍線：袖の主体、二重傍線：「ぬ」の解釈)
 〈源氏説・完了説〉④新編全集「このやまとなでしこー若宮があなたのお袖を濡らす涙の露のゆかりと思うにつけても、やはりこれをいとおしむ気にはなれません」

〈源氏説・打消説〉⑩旧全集「このやまとなでしこー若宮があなたのお袖を濡らす涙のゆかりだと思うにつけても、やはりこれを疎む気にはなれません」

〈藤壺説・完了説〉⑧工藤重矩「袖が濡れる露のゆかりだと思うにつけて、やはり、疎ましく思われてしまう、大和撫子は」

〈藤壺説・打消説〉⑬山崎和子「涙にくれる私の袖が濡れる、「露(あなた)」の「ゆかり(子)」と思うにつけても、やはり疎むことはできない、愛おしい「やまとなでしこ(若色)です」

〈藤壺説・両義説〉⑭ツベタナ・クリステワ「この大和撫子、若宮は、罪の花なので、つらい涙の露が袖を濡らし、疎ましく思われる。それにしても、この子は、愛の花なので、袖には愛しい涙も零れて、疎ましくは思われない」

次に、資料1～3に分類提示したところをふまえて藤壺の歌の解釈について考察する。

七、藤壺の歌の解釈Ⅰ―「袖」の主体―

まず「袖」の主体について。この「袖」は「袖ぬるる露」とあるように、「露」に濡れるものとして表現されている。この「露」は、源氏の贈歌の「露」を承けているが、四節で考察したように、贈歌の「露」は撫子の花の露の上にさらに源氏の涙（露）が降り注いだものである。仮に、藤壺の答歌の「袖」の主体を源氏と解するならば、贈歌では花の上に降り注いだ「露（涙）」として表現されていたものが、答歌では源氏の袖に降り注いだものとして表現されていることになる。その場合、本来緊密に対応すべき贈歌と答歌の表現の間に明らかな齟齬が生じてしまう。一方、「袖」の主体を藤壺とする場合、藤壺自身の袖が「露（涙）」に濡れるということになる。この歌では、結句の「やまとなでしこ」を「露のゆかりと思ふ」といい、すなわち「やまとなでしこ」を「露」につながるもの（ゆかり）だと表現している。つまり藤壺の歌は、贈歌で露に濡れていると表現されていた撫子の花のことを、わが袖が濡れてしまう「露」につながるものである、と贈歌に正しく対応させて表現しているものと理解される。後述のように藤壺の歌には皇子への心情が寓意されているが、表面上は、撫子の花の露によってわが袖が濡れる、と表現しているわけである。工藤重矩氏は、藤壺の歌は表の意味としては「植物としての撫子の花を詠んだもの」と解されるように表現されており、その裏に皇子への心情を寓意しているのであり、それは世間をはばかり「用心の歌」であるからだとする。源氏の歌が命婦への恋歌のように偽装

されていた（三節参照）のと同様に、藤壺の歌もまた「用心の歌」とする工藤氏の見解には基本的に同意される。

八、藤壺の歌の解釈Ⅱ―「ぬ」は完了か打消か―

「袖」の主体は藤壺と解すべきことになるが、次に四句目の「ぬ」について考察する。

前節の工藤氏は完了説に基づいて解している（六節資料3⑧参照）が、その理由について、工藤氏は上句の「と思ふにも」に注目する。そして、その語句によって上句と下句を結ぶ構文を用いる平安中期の和歌の用例（7例）⁽¹¹⁾を挙げて、それらはいずれも上句が「原因・理由」を、下句がその「結果」を述べる順接関係でつながるとする。したがって、負の感情を引き起こす「袖ぬる露のゆかりと思ふ」ことを原因・理由として、「なほ」「疎まれぬ」という感情を持つている（稿者注「ぬ」は完了）、と理解しなければならぬ⁽¹²⁾という。しかし工藤氏自身も認めているように、実方集Ⅲ209「水深みな隠せりと思ふにもまづあらはるる根にこそありけれ」の例は、女の隠していたはずの浮気（根・寝）が露見したことを歌うもので、上下句は逆接関係で解するのが妥当であろう。ただし本文に異同があり、問題が残るとして、氏はこの歌を逆接の例とは認定していないが、やはり逆接の可能性は残される。さらに、工藤氏の挙げる紫式部の用例「忘るるは憂き世のつねと思ふにも身をやるかたのなきぞわびぬる」（紫式部集Ⅰ・78、千載集恋五・908）の上下句の接続関係は、現在の諸註釈においてむしろ逆接に解する方が一般的なのである⁽¹³⁾。

そもそも、「と思ふにも」の構文では、接続助詞「に」が「も」を伴って上下句の接続関係を担っている。辞典類では「にも」の連語で立項される場合もあり、その場合は「につけても」などと順接的に訳されており、¹⁶⁾実際の用例でも順接の場合が多いようではあるが、逆接の例もしばしばみられる。例えば五節引用文B末尾の傍線部10の「にも」は順接であるが、それに直接続く次の引用文「つくづくと臥したるにも、やる方なき心地すれば、例の、慰めには、西の対にぞ渡りたまふ」（紅葉賀、①339頁）は、三節引用文A傍線部1「わが御方に臥したまひて、胸のやる方なきほど過ぐして」を承けるものである。源氏は、結局、臥していてもやる方ない思いがするので慰めに西の対（紫の上の在所）に渡るというのであり、二重傍線部「にも」の前後は逆接関係に解すべきであろう。つまり、「にも」は、助詞「に」が単独で用いられる場合と同様に、「に」の前後に述べられる文脈に従って結果的に上下句の順逆の接続関係が決まるわけである。¹⁷⁾したがって、藤壺の歌の「にも」も、前後の文脈関係によって判断されるべきものだとということになる。上下句を「と思ふにも」でつなぐ和歌の構文は、はじめから順接逆接など一定の文脈を予想させるものではなく、どちらにいたるとも定めがたい上句に述べられる思いが、結果的に、下句に述べられる状態に落着いたことを明示的に表す表現形式なのであろう。

それでは藤壺の歌の場合は、上下句の文脈関係をどのように判断すればよいのか。次の和歌の用例に注目したい。

a 心あらむ人に見せばや朝露に濡れてはまさるなでしこの花

（嘉言集・1223）

b 朝露を分けそほちつつ花見むと今ぞ野山をみな経しりぬる

（古今集・物名・438）

c 露けてわが衣手は濡れぬとも折りてをゆかん秋萩の花

（拾遺集・秋・182）

d 濡れつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へ

（古今集・春下・133）

e 霧深きあしたの原の女郎花心をよせて見る人ぞ見る

（源氏物語・総角巻⑤260頁）

f 露しげき蓬が中の虫の音をおぼろけにてや人の尋ねん

（紫式部集Ⅰ・3「筆の琴しばし、とかひ（紫式部集Ⅱは「言ひ」たりける人、参りて御手よりえむとある返事に）」

a～e はいずれも花を詠んだ歌であるが、和歌表現史を通して、景物としての花は本来、美しいもの、好ましいものとする認識が大前提としてある。三、四節に考察した引歌や源氏の歌も同様である。またaのように、花の美しさは露に濡れることでさらに増さるといふ、源氏の贈歌に通底する発想もある。ただし、その露によって袖などが濡れてしまうことにもなるが、それを厭わずに美しい花を求めることこそが真の風流心だとするのが、bとcである。またdとe（女郎花に宇治の姫君を寓意）では、雨や霧を厭わずに花を求める風流心が詠まれている。これらb～eの例のように、美しい花を真に愛する心の持ち主は、たとえ露や霧などの煩わしい障害があつたとしても厭うことはしない、とする和歌表現史における典型的表現・発想の系譜をみることができる。それ

は虫の音など他の美的景物の場合も同様で、fの紫式部集の例は、露深い蓬の中を厭わずに虫の音（琴の音を寓意）を求める者は並々ならぬ風流心が必要であるという。

藤壺の答歌の場合もまた、このような和歌の系譜にしたがつた類型的表現・発想を用いているのである。つまり藤壺の歌の表の意は、美的景物としての露に濡れた花に対して、わが袖が濡れることになるにしてもこの撫子の花を疎むことなどできない、と花の美しさを賞美しそれに執する風流心を歌っているのである。したがって、「うとまれぬ」の「ぬ」は打消と解すべきなのであり、上下句は逆接関係でつながることになる。上句に袖が濡れることをいい、逆接関係でつなぐ下句ではそれを厭わずに花を賞美するという、その歌の表現形式はcの例と全く同じである¹⁸。

なお、次のg hの例は、藤壺の歌と同じ「なほうとまれぬ」の語句をもつこととくに注目されてきた¹⁹。

g ほととぎす汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから
(古今集・夏・147)

h 思へども猶うとまれぬ春霞かからぬ山のあらじと思へば

(古今集・雑体・1032)

gは、美しい声を長く聞かせずにあちこち飛び回るほととぎすを浮気者に見立てて、諧謔的に恨む（うとまれぬ）の「ぬ」は完了歌である。hもgと同趣向の歌であり、諸所の山に掛かる春霞を浮気者の比喩とする。ともに美的景物としてのほととぎすの声や春霞への愛着を表現するものの、前述した藤壺の歌などの系譜とは明確に異なる、基本的に別種の表現形式である²⁰。

九、藤壺の歌の解釈Ⅲ—寓意および贈歌との対応—

藤壺の歌は、花への愛着を歌う表の意とともに、真意を託す裏の意として、皇子への情愛を寓意する。すなわち、わが袖が涙（露）に濡れることになるにしても、やはり皇子（やまとなでしこ）を疎むことはできない、というものである。

この歌では皇子（やまとなでしこ）を「露のゆかり」と表現するが、この「露」は、もともと撫子に降り注いだ源氏の涙である。つまり皇子が「露のゆかり」であるとは、皇子が源氏につながるものであること、すなわち血縁であることを示唆的に表してもいるのであろう。さらに、「露」は「はかないもの」の喩えとされ、例えば、横死した夕顔の娘玉鬘のことを「はかなくきえ給ひに夕顔の露の御ゆかり」（玉鬘巻③120頁）と表現するように、そこには、密通によるその源氏との血縁（ゆかり）が露のようにはかないものであることが比喩されてもいる。

藤壺の歌は、源氏とのはかない縁によつて生まれ、それゆえに悲しみの涙を流させる皇子を、それでも疎むことはできないという。もとより生まれた皇子には何の罪もない（不義を犯したのは源氏と藤壺である）のであるが、この皇子ゆえに世間の目を怖れ続けなければならぬ藤壺にとつて、ともすればその存在が忌避され、疎みたくなるのもやむをえない。しかし、この贈答の直前の対面場面に語られていたように（二節参照）、皇子は健やかに美しく成長し、帝に寵愛され、将来の東宮を期待される存在ともなっている。苦悩や悲しみに耐えて生み育ててきた、大切に愛しいわ

が子を疎むことなどできはしない、というのである。

以上の考察をふまえて、藤壺の歌の解釈のまとめとして、表裏の意に分けた現代語訳を提示しておく。

（表）わが袖が濡れる露につながるものであると思うにしても、やはり疎むことなどできない（美しい）大和撫子であることよ。
（裏）わが袖が濡れる（悲しみの）涙につながるもの（源氏との）はかない縁で生まれた子）であると思うにしても、やはり疎むことなどできない（愛おしい）わが子であることよ。

露に濡れる美しい撫子の花の魅力に、皇子への抗いがたい愛おしさを寓意しながら、表裏一体で、悲しみを超克する藤壺の母としての強い情愛が、きわめて美しく形象されている。

源氏と藤壺の贈答歌は、相手への心情を直接的に詠じ合うものではなく、第三者の皇子に対する心情を互いに独詠的に詠じている。したがって贈答歌の対応関係は複雑なものとはなるが、しかし答歌は贈歌に明確に対応して表現されている。すなわち、贈歌と同様に露に濡れた撫子の花に寓意を託しながら、贈歌が皇子への悲しみを表現する（心はなぐさまで↓露けさまざる・なでしこ／皇子）ののに対して、答歌では悲しみがあっても皇子を疎むことはできない、とわが子への情愛を表現して切り返している（袖ぬる露↓なほうとまめぬ・なでしこ／皇子）。そして、不義の関係ゆえに、源氏の歌が世を憚る実の親としての悲しみを詠ずるのに対して、藤壺の歌は、その悲しみをのり越えるより深い情愛を、いかに母性らしく源氏にも求めているのである。

十、おわりに―源氏物語の和歌と場面形成―

藤壺の歌は五節引用文B傍線部8「ほのかに書きさしたるやうなる」と、いかにもはかない書きぶりだとされるが、それは、答歌を求めた命婦の言葉「ただ塵ばかり」（同傍線部6）に対応しており、秘事に関わる危険な贈歌にからうじて応じたさまを表す。答歌は源氏に共感的な命婦によって喜んで届けられ、源氏を激しく感動させることになる（同傍線部9、10）。例になく藤壺の答歌をえられたのみならず、二人の子であることを示唆しつつ皇子への情愛を美しく表現して源氏に切り返した、その内容そのものに深く心を動かされたということであろう。

その後の物語展開において、源氏と藤壺は皇子の帝位実現のために心を合わせて協力していくことになる。藤壺は「（皇子の）御後身のなきをうしろめたう思ひきこえて、大将の君によろづ聞こえつけたまふ」（葵卷②17頁）「また頼もしき人もものしたまはねば、ただこの大将の君をよろづに頼みきこえたまへる」（賢木卷②107頁）など、後見役として源氏（大将の君）に深い信頼を寄せ続ける。一方、源氏もまた「大臣（源氏）のよろづに思しいたらぬことなく、公方の御後身はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こまかなる御心ばへのいとあはれに見えたまふを、（藤壺は）頼もしきものに思ひきこえたまひて」（落標卷②322頁。カッコ内稿者）など、皇子を支え続けることになる。このような二人の皇子をめぐる深い信頼関係は、前述の贈答歌以前にはみられず、親としての真情を互いに確認しあったその贈答歌を前提とすることで、そ

のような関係成立の必然性を理解することができる。贈答歌の表現内容が、その後の物語展開の根拠ともなっているわけである。

本稿にみたように、この源氏と藤壺の贈答歌は、直前に語られる皇子との対面場面における状況と密接に関わるものであり、そこに生じた心情が眼前の季節の景物に託して形象されている。源氏物語では、各巻は柱となる複数の場面を中心に構成され、その各場面に付随して必ずといってよいほど和歌が詠じられる⁽²⁾。源氏物語の場面とは、そこに語られる状況と密接に対応して表現されるこの物語の和歌においては、平安撰関期和歌の詠出条件となる〈折〉に相当するものとして形成されているのである⁽²²⁾。

源氏物語は当時の和歌詠出のあり方をふまえながら、高度の文体で形成された場面状況と対応する心情を和歌が表現するとともに、さらにその心情を根拠としながら長編の物語が展開するといふ、固有の仕組みを作り上げている。そしてそこにおける和歌は、不義の子への秘められた思いを詠ずるこの贈答歌のように、長編の物語ならではの独自で根底的な心情を、和歌表現史をふまえてつぎわめて美的に形象する。源氏物語における和歌の難解さと重要性、そしてその魅力のゆえんである。

注(1) 源氏物語の本文は、小学館新編日本古典文学全集により、巻名・冊数・頁数を付す。

(2) 例えば、岩波新日本古典文学大系『源氏物語』の訳には「若宮に擬えて眺めても心を慰められず、かえって花の露にもまして涙の添え加わる撫子の花だ」とある。結句「なでしこの花」を藤壺の比

喩と解する説もあるが、この歌が皇子との対面後の心情を表現する引用文A傍線部1をふまえることや、歌の後の引歌との関わり(後述)などから、皇子と解すべきである。従来の諸説は、注(8)参照。

(3) 和歌の本文は新編国歌大観によるが、私家集は私家集大成(CD-ROM版)による。適宜漢字を宛てるなど、表記を直したところもある。また万葉集には旧歌番号を付す。

(4) 伊藤博『萬葉集釋注 四』(一九九六年、集英社)は「なでしこに寄せて、相手(稿者注・家持の婚約者)の坂上大嬢が美しく成長するのを待ち速く思う気持ち」とする。

(5) 片桐洋一校注、岩波新日本古典文学大系『後撰和歌集』の注。

(6) 大野晋編『古典基礎語辞典』(二〇一一年、角川学芸出版)は、助動詞「き」と「けり」の基本的な用法について、「キの意味は、過去のことについて自分に確実な記憶があることを表すので、回想と呼ぶのがふさわしい」とする。一方、「ケリは、過去・現在のことに對して、「そうだったのだとはじめて気がついた」という意を表」すが、「単に過去の記憶を表すのではなく、現在の時点で認識を新たにしたいという意を示す」とする。

(7) なお、源氏の歌と多くの表現が類似する歌「よそへつつ見れどつゆだに慰まずいかがはすべきなでしこの花」(義孝集I・73、恵子女王)を作者が参考にしてしているのは明らかであるが、恵子の歌は無沙汰の続く息子義孝の来訪を求める歌(恵子女王は摂政藤原伊尹の妻、東宮妃懐子や少将義孝の母で、この歌の詞書には「母うへ、東宮にさぶらひ給しに、いとまにて久しうまい侍らざりしかば、なでしこにつけてたてまつりし、母うへ」とある)であり、わが子への悲しみを独詠的に詠ずる源氏の歌とは趣旨が大きく異なる。

(8) 以下の諸説(参考文献)はそれぞれ著者年順。

〈テキスト等〉 ↓略称 ⑨日本古典全書『源氏物語一』(一九四六年、朝日新聞社) ↓全書、⑩日本古典文学大系『源氏物語一』(一九五八年、岩波書店) ↓旧大系、⑪『源氏物語評釈第二卷』(玉上琢彌、一九六五年、角川書店) ↓玉上評釈、⑫日本古典文学全集『源

氏物語(一) (一九七〇年、小学館) ↓旧全集、②新潮日本古典集成『源氏物語二』(一九七七年、新潮社) ↓集成、③新日本古典文学大系『源氏物語一』(一九九三年、岩波書店) ↓新大系、④新編日本古典文学全集『源氏物語①』(一九九四年、小学館) ↓新編全集

⑤『源氏物語の鑑賞と基礎知識22 紅葉賀・花宴』(伊藤博編、二〇〇二年、至文堂) ↓鑑賞と基礎知識、『源氏物語注釈三』(山崎良幸、和田明美、梅野きみ子、二〇〇二年、風間書房) ↓注釈

⑥『論文』木船重昭「藤壺宮 若宮誕生以後」(『源氏物語の研究』(統)一九七三年、大学堂書店、小町谷照彦「光源氏の「すき」とうた」(『源氏物語の歌ことば表現』一九八四年、東京大学出版会)、⑥川島絹江「藤壺の和歌」『源氏物語』における「伊勢物語」受容の方法」(『源氏物語の源泉と継承』二〇〇九年、初出一九九二年、笠間書院)、⑦吉見健夫(旧稿)「紅葉賀巻の藤壺―贈答歌の解釈から―」(『中古文学論攷』一九九六年二月、柏木由夫「紅葉賀」の藤壺の和歌「袖ぬるる」の解釈について」(『王朝女流文学の新展望』二〇〇三年、竹林社)、徳岡涼「紅葉賀巻の藤壺詠について」(『国語国文学研究』二〇〇三年三月)、⑧鈴木宏子「藤壺の流儀―「袖ぬるる」の露のゆかりと思ふにも」(『王朝和歌の想像力 古今集と源氏物語』二〇〇二年、笠間書院、初出二〇〇四年)、⑨工藤重矩「紅葉賀巻「袖ぬるる」の和歌解釈―文法と和歌構文―」(『源氏物語の婚姻と和歌解釈』二〇〇九年、風間書房、初出二〇〇七年)、⑩山崎和子「(露)のゆかりの(なでしこ)の花」(『源氏物語における「藤壺」の表現と解釈』二〇〇二年、風間書房、初出二〇〇八年)、上原作和「転移する「主題論」―意味生成のテクストとしての『源氏物語』―」(『テーマで読む源氏物語1「主題論」の過去と現在』二〇〇八年、勉誠出版)、『源氏物語』の和歌を読む(一)」「(『立教大学大学院日本文学論叢』二〇〇九年八月)、⑭ツバタナ・クリステワ「助詞助動詞のマジックミラー」(『心づくしの日本語』二〇一一年、筑摩書房)

(9) 旧稿(注⑧⑩)では、この藤壺の歌の解釈について、他の藤壺

の歌二首とともに考察し、主に体言止めの歌の形式の類型に照らして、四句切(完了説)とは見なしがたいことなどを論じた。本稿では、場面状況や源氏の贈歌との対応関係をふまえた上で、さらに和歌表現史・国語学的分析などを新たに施すことによって、詳細かつ全面的に考察し直す。

(10) 注(8)⑧に同じ。六節資料3⑧の現代語訳参照。

(11) 拾遺集540、紫式部集I78、和泉式部集II555、源氏物語620、実方集III209、千載集999、千載集1135の計7首。

(12) 「と思ふにも」は、六節資料3では諸説すべてが順接関係で解している。

(13) 注(8)⑧に同じ。

(14) 実方集II281では「水深みなにかふせりと思ふらむあらはれやすき芹にぞありける」とある。

(15) 田中新一「紫式部集新注」二〇〇八年、青簡社)は、「人忘れやご無沙汰は悲しい世のならいと思うにつけ(それならば、といつて)、身の処しようとしてなく、つらい思いはどうしようもないわ。」と訳し、「自分にもよくある「人忘れ」かと思ひ、一旦は慰撫するものの、そのたまの来訪は心待ちされる人だけに、一層落胆を誘う」(傍線は稿者)とあり、「と思ふにも」の上下句を逆接関係として解説する。その他、紫式部全歌評釈(小町谷照彦、「国文学 解釈と教材の研究」一九八二年一〇月、学燈社)、紫式部全評釈(南波浩、一九八三年、笠間書院、新日本古典文学大系「千載和歌集」(一九九三年、岩波書店)なども同様である。

(16) 「言語大辞典」(小学館、一九八三年)の「にも」の項には、「に」の意に従って種々の意を表す」といい、「いみじくうれしき」(「ウレシイニツケテモ」涙落ちぬ)「源氏・紅葉賀」の用例を挙げる。

(17) 山口堯二「古文における接続表現―順接と逆接―」(山口明穂編『国文学講座3 古典解釈と文法―助詞の機能』一九八七年、明治書院)は、助詞「に」の用法について「意味関係からいえば順接的なものと逆説的なものがあり、どちらにも片寄らない」として、文

脈依存的に順接・逆接など多様な意味関係が定められるとする。また助詞「も」は、一般に係助詞として「並列・添加・強調」などの意を表すが、他の接続助詞「に」「て」などに下接する場合は「逆接的な条件関係を顕示する役割を果たすことが少なくない」(同氏「条件形式の成立」『古代接続法の研究』第二章、1980年、明治書院)とする。

(18) 六節資料2の現行の主要な諸説の中で、本稿のように、袖の主体を藤壺「ぬ」を打消、さらに上下句を逆接と解するのは、Ⅳ⑫の旧稿(注(8)⑫)以外にはない。また、藤壺の歌は明確な表現形式をもつことから、Ⅴ⑭のように両義説に解することもできない。

(19) g hは、注(8)⑦鈴木論文が古今集の影響力の大きさなどから「ぬ」を完了と解する根拠とする。

(20) なお注(8)⑦鈴木論文は、打消説のように、「うとむ」が否定形を伴って用いられる歌の例は稀であるという。しかし藤壺の歌で

は、次節に述べるように、密通の結果生まれたわが子を、つらい悲しみはあるがやはり疎めないという、g hの例とはちょうど逆の、特異な心情を表現するためにあえて用いているのである。

(21) 清水好子「源氏物語の作風」(場面と時間)『源氏物語の文体と方法』一九八〇年、東京大学出版会)など参照。

(22) 久保木哲夫『折の文学 平安和歌文学論』(二〇〇七年)の「序に代えて」には、(折)の定義が、歌を詠むにあたっての作者や享受者のおかれている「シチュエーション」(場面・状況)であり、季節・天候・人間関係・心理状態など、その表現に深く影響する「歌の詠まれる場」などと詳しく説明されている。

*本稿は、平成二十四年度早稲田大学国文学会秋季大会での研究発表を發展させて成稿したものです。会場その他で御意見を賜った皆様方に感謝申し上げます。

新刊紹介

大津雄一著

『『平家物語』の再誕』

——創られた「国民叙事詩」

『平家物語』はいかにして叙事詩的文学たりえたのか。今日では自明のことである。この認識に着目し「国民的叙事詩」としてどう確立し、近代以降の社会において「利用」されてきたのか、その経緯を追い、

解明しようとするのが本書である。

第一章・第二章では、明治の急激な時代変動期に高まる「国民文学」の希求、さらなる国文学の普及等を経、『平家物語』を「国民的叙事詩」として読むことがなされるに至った事情が述べられる。第三章では、大正から昭和の戦下、例えば武士道の精神を学ぶものとして等日本人の精神教育のための教材にされてきたことを論じ、それをうけて第四章では、国文学が戦後の復興期にいかにして残り、『平家物語』が「国

民的叙事詩」として再び受容されていったのか、その様子が国文学者たちの動向を辿りつつ語られる。

時代毎の影響を受ける古典文学の享受のあり方を改めて認識させられる。

諸分野に多大な影響を与えた『平家物語』。その享受の一側面をつぶさに捉えた一冊である。

(二〇一三年七月 NHK出版 B6判
二五三頁 本体一〇〇〇円)〔篠崎惇子〕